

## 中露国境紀行 2019

### —草原は地平線のかなたに果て、紺碧の空は限りなく高く—

木村 崇

#### 思いのほか近かったハイラル

新装工事半ばの千歳国際線ターミナルは、今ここでしか味わえないにちがいないゆとりがあった。おかげで旅立ち前の慌ただしさや緊張は少しも感じなかった。関西や関東からの参加者も台風 15 号の北海道接近をкаろうじてかわして新千歳空港に集結、中継地の北京空港には定時を少しまわって到着した。目的地ハイラル行き中国国内便出発までは 3 時間以上あったので、各自食事や買い物に散った。前日の 9 月 9 日、北大スラ研でひらかれた国境紀行恒例の前日セミナーに集まった人たちの 3 分の 1 は新人さんだった。驚いたことにみなさんこの旅行の趣旨をよく心得ておられ、常連さんたちとも以前から顔見知りであったかのような打ちとけぶりだった。

中国の地方空港はあちらもこちらも全面改装されているようで、まぶしいほどの出来たてピカピカぶりだ。ハイラル空港も同じだった。40 分ほどの延着で深夜に近かったが、現地ガイドの白布仁 (Baiburen) さんがニコニコ顔で出迎えてくれた。誰かに似ていると思ったら、放浪の画家山下清を演じた喜劇俳優の顔が浮かんだ。みずからモンゴル族だと名乗ったが、次々にくりだす軽口はまさに関西のお笑い芸人のノリだ。私たちは誰からともなく「ハクさん」と呼ぶようになった。

ハイラルは現在ではホロンバイル市を構成する一つの区だとのこと。「ノモンハン事件」(ロシアやモンゴルでは「ハルヒン・ゴル [=ハルハ川] 戦争」と呼ぶ) で関東軍の主力を担った第二三師団の本拠地として、ハイラルは日本人にはなじみの深い地名になっている。ホテルも中国趣味の装飾が気になるものの、仕様は世界標準の立派なものだった。

翌 9 月 11 日は朝食をすませるとすぐに、4 箇所あったという第二三師団の築いた地下要塞の一つ、北山陣地跡の見学に向かう。屋外に展示されているものは主としてソ連軍の重火器類や戦車、戦闘機などで、当時はなかったはずのわりと近代的なミサイルまで鎮座していた (写真 1)。そしてなぜか五星紅旗をまん中に、ロシア共和国の三色旗とモンゴルの国旗が左右に高々とはためいている (写真 2)。これらが表象することからの歴史的関連性について、無理矢理つないで考えてみたが、私が出発前に丸ひと月かけて蓄えた知識をもってしても、よくわからなかった。



写真 1



写真 2

地下壕は頑丈にできていて、昔の施設がそのまま博物館の展示会場に転用されている。無線室跡や兵士が寝泊まりした部屋なども原形保存されていた。これも意味的関連性がよくわからないのだが、なぜか無料で小銃の実弾射撃体験が出来る場所まで作られていた。博物館の入口には「愛国教育示範施設」とか「国防教育示範基地」、「抗戦記念施設遺跡」という看板がかかっていたので、もしかしたらそれらの目的に合致するのだろうか（写真 3）。ハクさんの説明では、壕を掘ったのは当時満洲に暮らしていた漢・満・蒙の民族の人たちで、完成すると秘密保持のために皆殺しにされたとのことだった。戦国時代ならいざしらず、20 世紀も半ば近くになっていたのに、そんなことがほんとうにあったのだろうか。これは調べてみる必要があるようだ。



写真 3



写真 4

この博物館には主に日本が「でっちあげた」満洲国（中国ではその前に「偽」という漢字がかならず添えられる）の歴史に関連する写真類が多数掲げられている。「ハルハ川戦争」関連の写真のなかで、少し気になるものがあった。細菌兵器の研究・製造のために人体実験をしたことで悪名高い「七三一部隊」の石井四郎軍医大佐が、戦場で「細菌戦」を指揮したとある（写真 4）。しかしその次のコーナーには 1942-1944 年に石井部隊の実験施設で犠牲になった人名一覧があった（写真 5）。はたしてノモンハン戦時にはすでに実用可能な細菌兵器が出来ていたのである

うかと、私は心にひっかかるものを感じた。精読したはず文献類を帰国後再確認したところ、泰郁彦が『明と暗のノモンハン戦史』（PHP, 2014）の中で、「日ソ両軍とも互いに危惧していた化学兵器（毒ガス）と細菌兵器は、限定戦争という性格もあってか使用は抑止された。それでも石井給水部隊は実験レベルながらホルステン川に細菌を流した形跡がある」（p.282）と、たしかに書いていた。それを知って、なんともおぞましい気分になってしまった。ハルハ川の支流であるホルステン川は、日本軍にとっても希少な水源だったはずではないか。

博物館見学のと、いちど市内に戻った。第二三師団の建物は取り壊されていたが、大日本帝国の痕跡はここにもあった。サハリンでは今もあちこちに遺跡が残っているが、ハイラルにも神社があったようで、幅のひろい石段と手水舎の場所を示す石づくりの屋根が残っていた。「神州日本」が国家神道特有の装いをほどこされてこのような形骸を残したのであろう。「つわものどもが夢のあと」という芭蕉の句の一節が思い浮かんだ（写真6）。

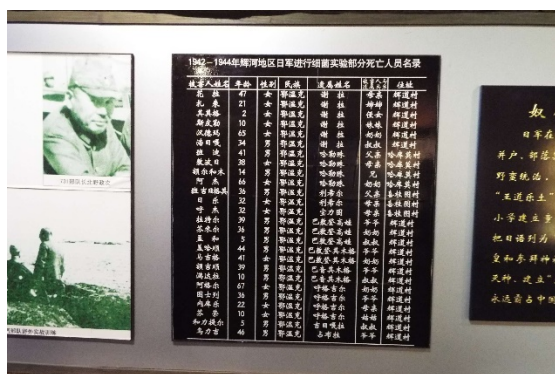


写真5



写真6

### ホロンバイル大草原を縦断して阿木古郎（アムグロ）へ

昼食は餃子。中国の東北地方はどこへいっても多種多様な餃子が食べられてうれしい。市街地を抜けるとやがて、目を見張るような光景があらわれた。車窓から見える景色は360度すべて、起伏のない草原が地平線の果ての果てまで広がっていたのだ。空の青さも、生まれてこのかた一世紀の4分の3を経た今日まで、一度として目にしたことのないような色合いだった。「紺碧」というのがこれだろうか。いや、すこし紫色がかっているようにも見たが、それがどの文献にもかならず出てくるホロンバイル（またはフルンボイル）大草原だった。今では片側一車線の立派なアスファルト舗装の道が南西方向にまっすぐ走っている。80年前第二三師団の新米兵士たちは30kgにもなる背嚢や武器・弾薬、塹壕堀用丸シャベルなどを背負って、この草原を一週間かけてひたすら行軍していったのである。

秋の気配のただよいはじめた草原は枯れかかった草もところどころ混じっていたが、まるで緑の絨毯を敷きつめたようなのどかさにあふれていた。しかしハクさんによれば、草地のすぐ下



は褐炭層でその下は永久凍土となっており、新幹線延長計画のネックになっているのだそうである。そういえば北海道十勝の牧草地などとはちがって、草の丈がずいぶん低い。十勝や別海と同じく草を刈取ってバウムクーヘン状に丸めたもの（ロールベールラップサイロのようなもの）があちこちに点在しているが、数が少なすぎはしないかと心配になった。バスを下りて外に出てみると地面は靴あとがくっきり残る砂地だった（写真 7、ただしこれはノモンハンで撮ったもの）。



写真 7

の）。幾種類かの草にまじって可憐な花が咲いている。でもこのひ弱に見える（思いのほかしぶといのかもしれないが）植物は、気候条件が少し変わるだけで死に絶え、いつの日か砂漠になってしまうのではないだろうか。「絶滅危惧環境」という言葉がふと浮かんで、いいようのない不安におそわれた。そういえば雨水がたまっただろうか、大きな池のようにになっているものを

所々見かけたが、岸辺が白いもので掩われていた。ハクさんによればあれは塩だそう。ハルハ川から東側へ 2, 30km ほどにもわたって広がっていた戦場（日本軍はハルハ川の水辺にほとんど近づけなかった）で、夏場の日中、日照りにさらされ渴きにもがき苦しんだ日本の兵士たちは、泥水のたまっているのを見つけて歓喜して飲み込んだが、とたんに吐き出したという。ノモンハン戦争をとりあげた文献類にはたいがいそんな描写あった。

道中、人民公社跡をみかけた。当時の中国共産党は内モンゴルの人々に放牧生活を断念させようとしたのだろう。ソ連でも極北圏でトナカイの放牧生活をしていた人々をコルホーズ化する政策をとった。ソ連という国家が崩壊し経済が壊滅的に破綻すると、このコルホーズという集団的な経営形態が逆に、最貧困化をかうじて食いとめる手がかりになったということを知ることがある。しかしロシアとは違って、「塞翁が馬」のたとえは中国では無縁のようだった。まだ十分に使える建物の群れが整然とならんでいるものの、今はすっかり無人なのだそう。観光用ではない本物の、遊牧民が生活する白いゲルが二つ、三つ見えてきた。そのそばに結構大きな建物が建っている。あれは組み立て式の冬期用家畜小屋で、羊や牛は夏場に刈り取ったサイレージを食べて、翌年若草が生えるまで過ごすのだという。馬は冬でも雪の下に残った草を食むから小屋には入れる必要はないのだそう。零下 50 度にもなるのに大丈夫だというから、驚くほかない。

ロシアとの国境にある大都市の満州里と寒村に過ぎないノモンハンとを南北に結ぶ道と、私たちが草原を縦走してきた南西方向の道との交差点にある小さな町がアムグロである。現在は「新バルグ左旗」という地名になっている。ここには、文化・観光関連の役所がいくつか同居す

る三階立ての合同庁舎があり、ノモンハン戦争を語る資料もこの建物内の一角に展示してあった。ノモンハンの現地博物館が建替中のため、臨時の保管場所になっているとのこと。宿舎となった「中安賓館」は、中国の田舎町でよくお目にかかる、いかにもそれ風のホテルであったが、ここではきっとこれでも一番立派なのだろう。でもいよいよノモンハンの地を踏めるかと思うと、お湯の出方が不安定などといった細かな問題は気にならなかった。なにしろ明日は今回の旅行で一番の長旅で、朝7時半には荷物をまとめて出発しなければならないのだ。

### ノモンハンから満州里へ

9月12日、7時朝食。7時半にはいつもどおり遅刻者皆無で出発。今日も抜けるような晴れ空である。地平線近くにすこし真綿みたいのが浮かんでいるだけで、全天どこまでも紺碧一色だった。私の読んだノモンハン関連本は10冊ほどだが、どれもがハルハ河北岸（西側、つまりモンゴル側）の方が、右岸（東側、つまり満洲側）よりも5,60m程も高く、高い左岸に並んだソ・蒙軍は強力な砲弾で関東軍を文字通り「狙い撃ち」してきたと記している。そして岸から少し離れてしまえば、ハルハ河の東岸側からはソ・蒙軍の姿はまったく見えなくなるため、日本製の大砲類はソ連軍のものよりもかなり射程距離が短い上に照準が定められず、手も足もでなかったらしい。ソ・蒙軍の総司令官となったジューコフ将軍は「八月大攻勢」の戦略・戦術をたてた際に、この「地の利」を積極的に活かしたとされるが、現地に来てみてありありと想像ができた。

アムグロからノモンハンをめざすと、やがてバスの右側（つまり西側）のはるか先に、わずかだがハルハ河の岸辺が黒々と見えてくる場所があった。今からちょうど80年前関東軍の幹部たちは勝手に、モンゴルに（実態としてはソ連に）ハルハ河を正式な国境とし、彼らが主張する線より20kmほど西に後退させようと目論んだ。しかしその結果、死傷者総数1万8千人もの犠牲を出しながら、結局おめおめ引下がるしかなかった。いくら「負けてはいない」と強弁しても屈辱に甘んじたことは覆せない。道路の右脇には所々国境監視塔があり、緩衝地帯を示す、鉄線で結ばれた柵が並んでいるのが道沿いに見えてきた。しかし放牧された牛や羊は柵を楽々くぐり抜け、あちこちで緩衝地帯に生えている草を食んでいた。あたりまえだが動物には「国境」などという人間固有の構築物などは視角に入っていないのである。

ノモンハンは人口わずか300人の文字通りの寒村だった。この付近に將軍廟というラマ教の建物があるそうで、昨日訪れたアムグロの展示館には、その屋根に登ってソ・蒙軍を監視する日本兵の写真があったのを思い出した。今はそんな緊張はどこにも残っていない。村道を歩くと牛糞の落とし物がある（写真8）。これはできたてのほやほやだが、すっかり乾燥したものが村の所定の場所に、サイロのようなかたちに積み上げてあった。草原には狼も多数生息しており、そ

の糞を燃やせばどんな悪天候でも煙が高々とのぼったので「ノロシ」に使ったという。ハクさんの蘊蓄を傾けた解説によれば、「狼煙」と書くのはそんないわくからだそう。村内を歩いていると、平山郁夫画伯の寄付で建てられたという、青い屋根の小学校の校舎があったが、生徒の声はしなかった。この村にははたして人が住んでいるのかと思われるほど、どこまでも静まりかえっていた。



写真 8

村域からすこしはずれたところに、「ノモンハン戦役遺跡陳列館」という大きな看板を掲げた、風変わりな門がある(写真9)。陳列物がアムグロに退去中であることはすでに述べた。その敷地内に残った木造の建物はお土産屋さんになっていた。陽射しのきびしさに閉口していたので「ホロンバイル草原留念」と書かれた麦藁帽子を買った。わずか10元(170円)だった。蜂蜜が自然乾燥してできたという黄色いかたまりの入ったものも買った。こちらは50元と少々値が張ったが、帰国後これをノモンハン土産だといってあげたら、とても評判がよかった。



写真 9



写真 10

お土産屋さんを出てその建物の壁をみると、「ノモンハン戦争」についての簡単な紹介が大きく書かれていて、その端っこに小父さんが座っていた(写真10)。ここにも「日本軍は最後に細菌戦を行った」と書いてある。そして、ハイラルの北山陣地跡でもたしか目にしたのだが、「世界反ファシズム戦争の1頁」という文言が書かれていた。ロシアでも1945年8月9日に始まった「日ソ戦争」は「世界反ファシズム戦争の一環」とされており、サハリンやクリル諸島へのソ連軍侵攻は「日本ファシズムからの解放戦争であった」という決まり文句が、サハリン各地に立っている記念碑には例外なく書かれている。平均的日本人の抱く「第二次世界大戦イメージ」と比べると、中・露の認識はどうやらこのあたりで微妙にかみ合っていないような気がする。樺太や千島に住んでいた人たちは、ソ連軍が侵攻してきて居住地を奪われ、本土に引き上げざるをえなかった。当時かれらが全員軍国主義思想に染まっていたとしても、それでは「誰が解放された



のか」という疑問が残るのは当然だろう。

陳列館の敷地の外に出てみると、五星紅旗を掲げた自走するらしい大砲や、わりと新式ではないかと思われる戦車が置いてあり、子供たちがまるで遊園地に来たみたいな感じで、それに乗って遊んでいた（写真 11）。この武器が「ノモンハン戦争」とどんな関係があって置かれているのか、設置目的は何なのか、どうにも合点がいかなかった。



写真 11



写真 12

ノモンハンを後にすると、私たちは満州里に向けてひたすら北へ北へと走った。途中、中露国境紀行では恒例になっているのだが、戦争の犠牲となった人々を国籍の別なく弔うための献花を行った。現地観光会社を通じて事前に通知しておいたのだが、中国当局は「宗教行為」とみなしうる儀式は許可できないとのことだった。そこで私たちは一人一人が白い花を献花するのを断念し、ひとまとめにして女性のうちの一人がそれを持ち、団長格の私が色とりどりの花束を持ち、並んで供えることにした（写真 12）。私は簡単な言葉を発するように促されたので、あえて「犬死」という言葉を口にした。

私の父はノモンハン戦にもその一部に関わった第七師団に、時期は異なるが、所属していた関東軍の軍人であった。そんなわけで私は満洲の奥地の生まれである。父は私の生後間もなくフィリピンに送られ、翌年、つまり敗戦の年の5月末にルソン島北部で戦死した。中二の夏、遺族会から指名され、靖国神社への参拝遺児団の一員として北海道から鈍行列車に揺られて上京した。そのとき周りの大人たちは、戦死者たちの尊い犠牲があったおかげで生き残った人たちの幸せが実現したのだと言うような言葉を、判で押したように繰り返した。

十数年前、フィリピン女性を妻に持つ小・中・高以来の同級生のはからいで、父が戦死した地をなんとか訪れることが出来た。それは亡き母が実現できなかった願望をかなえる旅でもあった。現地に来て思いも寄らぬ事実を知った。段々畑の広がるルソン島北部山岳地帯は日米の激戦地と化し、そこに住んでいたフィリピンの山岳民がその戦火の犠牲になったという碑文を見てしまったのである。その犠牲者総数は日米両国の戦死者をあわせた数をはるかに越えたとも書いて

であった。私の父は砲弾に碎け散ったのでひとかけらの骨も残っていない。いろいろ考えたすえ、その時以来、私の父は犬死したのだと思うようになった。しかも単に意味なく死んだのではなく、多くの罪なき人々を巻き添えにする、罪深い行為の果てに命を落としたのだ、と。

私はノモンハンで命を落とした日本人、ソ連人、モンゴル人、内モンゴル人、そのすべてが犬死にしたのだと結論する。しかしそれだからこそ、今を生きるものたちはそれらの戦争犠牲者に心をこめて鎮魂の祈りを捧げるべきであると、たしかそのようなことを述べ、献花した花束を祭壇代わりにしたアーチ型の白い鉄柵からおろした。そのあと私たちは一路 200km 先の満州里を目指した。

目的地が近づくとつれて、地平線に替わってうっすら低い山の連なりが見えてきた。方角からするとあれはネルチンスク条約で、ロシア帝国と清が境界を分かつための起点とした河川の分水嶺のある「外興安嶺」だろうか。書物からの印象では堂々たる山脈のような気がしたのだが。

昨年の第3回中露国境紀行参加をきっかけに、1689年の「ネルチンスク条約」が露・中という新旧両帝国のその後の命運を分かつ契機となったことを知った。条約締結地のネルチンスクはアムール河（黒竜江）の上流にロシアが設けた丸太造りの城壁に囲まれた要衝の地である。両帝国の国境画定に関するこの条約が、アムール河の持つ地政学的価値に深く関係していること、そしてその約170年後の1858年に結ばれた「愛琿条約」や1860年の「北京条約」もまた、アムール河の地政学的意義に重大な変更を加え、開国前の日本をも揺さぶることになるという世界史の一大事件であった。

これから訪れようとしている満州里のすぐ近くを流れるアルグン川はそのまま下って、やがてアムール河に繋がる。上流と下流では川幅も流量も大差があるけれど、名は違ってもじつは一本の川なのである。さてそのアルグン川は琵琶湖の4倍はあるというフルン湖を水源としており、さらにそのフルン湖に流れ込むウルシュンという川は、内モンゴルを代表するもう一つの大湖、すなわちボイル湖を水源としている。日本人のいう「ノモンハン事件」の代わりに、ロシアやモンゴルが「ハルハ川戦争」とよんでいる地名の川の水はじつは、まさにそのボイル湖に注いでいるのである。周知のようにアムール河口はオホーツク海に開かれている。北海道のオホーツク海岸にたどりつく流氷も、もとはといえばアムール河の水が氷結したものといわれる。そうするとノモンハンが網走や根室とひとつの水系で結ばれていると考えてもよいのではないだろうか。そう思うと、妄想かも知れないが、なんだか気宇壮大な夢を見ているような気になった。

バスは市街地に入ってゆく。私たちは思わず目を見張った。まるでワンダーランドへ入り込んだような錯覚に襲われたのだ。中心街につながる真っ直ぐな広い自動車道路に沿って、派手な色彩をほどこされた大きな建物が次々に現れる。しばらくして、どうやらそれはロシアの有名な建物をまねて建てたものらしいことに気付いた。けばけばしい色のネギ坊主の屋根が幾つものっ



けたあれは、もしかして、赤の広場の「聖ウァシーリー寺院」だろうか？ するとこちらはペテルブルグのネフスキー大通にある「カザン寺院」か。あちらはエルミタージュ美術館のある冬宮だろうか。かなり小さめだが、あちらの建物は「モスクワ大学」に似ているぞ！ それよりなにより驚いたのは巨大なマトリョーシカの形をした建物があったことだ。聞くと五つ星のホテルだという。あれでちゃんと窓もあるのだそう（写真 13）。現代中国の建築家たちはいったいなんというとてもない感覚と趣味をしているのだろうか。いや多分あれ

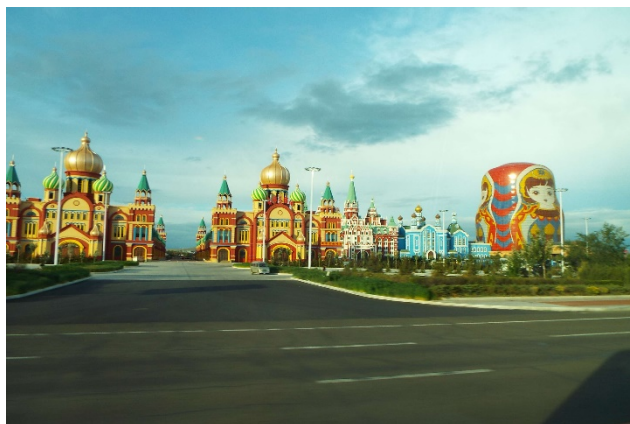


写真 13

は設計者の発意ではなく、注文主の強力な要望を受け入れた結果ではないだろうか。でも、満州里の人たちは、あんな建物の建設計画が動き出していることを知ったとき、はたして誰も反対しなかったのだろうか？

バスはようやく宿舎に近づいたらしかった。シベリア鉄道に繋がる鉄路建設事業に従事していたロシア人が建てたという旧市街地域にあるホテルの「友誼賓館」は、さすがに洗練されていてほっとした。荷物を下ろしてから私たちは夕食をとるため市内のレストランに向かった。

### 満州里から見たロシア領、ソ連風情の残るチタ州

翌9月13日、旅行予定では午前中満州里での国境事情を視察するためのバスツアー、昼食後はいよいよ「国際バス」に乗り換えて、陸路でロシア領のザバイカルスクに入り、120km 走って宿泊地であるクラスノカームenskをめぐすことになっている。

中国側の国境警備部隊の担当区域に割りふった数字の「二」と、駐屯地あるいは哨所を意味する、「上」と「下」を重ね合わせて一字にした奇妙な漢字からなる「アールカ」という地帯を通り、中露国境紛争の問題のもう一つの地となったポリショイ島のあるロシア側の光景を遠望しようと、いつものバスに乗って出発した。一本道なのだが、ドライブ気分で快調に追い越してゆく車が結構あった。今や中国側の国境地帯付近は観光スポットになっているようで、国境地帯のピリピリ感は微塵も無い。国境警備の立派な見張り台のあるあたりは散策や休憩のために整備されている。散策用に3本の橋を交差させて架けられた変わった水上構築物の下をみると、大量の、羽根を切って飛べなくされた鴨の群れを三艘のボートがあちらこちらへと誘導していた。エサでも食べさせているのだろうか。物売りの姿がちらほら見える。これで、スピーカからけたたましい音量で流される、テープに吹き込んだ売り声さえなければ、まことにのんびりした気分

になれるのだが、今の中国にそれを望むのは「ないものねだり」でしかないであろう。

このあたりで起きた国境画定をめぐる交渉に関しては、同行した岩下北大教授が専門家である。今回の旅行参加者は教授の著作物二点（『中露国境ゼロ地帯：チタと内モンゴル』、『中・ロシア国境の旅：「4000 キロ」の舞台裏』）のコピーを事前にもらっており、前日セミナーでも概略は聞いていた。しかし現場に立ってみるとなかなか話はややこしいということがよく分かった。一昨年の第 2 回中露国境紀行では「領土二等分」で有名になったハバーロフスク近くのポリショイ・ウスリー島とタラバーロフ（中国名ヘイシャーズ）島へ実際に足を踏み入れ、中露両国民の領土をめぐるわだかまりを肌で感じる事が出来た。岩下教授によれば、あれとまったく同様の軌轢がアムール河の遙か上流、アバガイト村のそばにあるアルグン川の中州であるポリショイ島をめぐるでも起こったという。内モンゴル側よりは大分高い、丘陵か台地らしきものを背景に、ロシアの村影らしいものが見えていた。どうやらあれがアバガイト村のようだ。中国側と長年にわたって土地争いをしてきた人々の住んでいるところという面影はなく、ひっそりと静まりかえっている印象だった。平原を流れる川という「生き物」を国境とせざるをえなかった中露の国民にとって、一時のメリットは別の時のデメリットになるわけで、お互いにゴリ押しはできなかったのであろう。自然の摂理に従って蛇行の方向を変える川に罪はない。だから人間は平和裏にそれを受け入れるしかないのだ。

私たちは市内で昼食を済ませると、街外れの、「国門」と呼ばれる巨大な塔を二つ繋いだ奇妙なかたちの建物が手前ひとつ、また遠方のロシア領にもひとつ見えるなじみの場所に戻った。そのあたりの広大な敷地には、これも巨大な交易専用の商業施設のビルが建っており、ロシア国民は中国への入国手続き抜きに自由に買い物をして、そのまま戻ることができるしくみになっていた。国際バスの発着場はその近くにある。まだ時間があるので私たちは待合室でのんびり過ごしていた。するとロシア人の若い男が二人、大声で早くバスに乗れと叫んで近づいてきた。添乗員の手塚さんやハクさんの姿がみあたらなかったが、私たちはすでに座席の 3 分の 2 ほどが乗客で埋まっている国際バスに乗り込んだ。ロシアへは一泊旅行なので大きな荷物はホテルに置いてきたから、みな身軽であった。さいわい手塚さんも気付いて小走りでやってきてバスに飛び乗った。

車で国境を越えるのは空路よりもはるかにややこしかった。中国から出国するには、まずバスに乗り込んでくる出国審査の管理官に、事前に提出された名簿にしたがって、ひとりずつ顔とパスポートを見比べられ、最後に人数の確認がなされる。そのあと出入国管理の専用施設に着いて下車し、空港と同様の審査を受け、パスポートに出国のスタンプをもらってブースを抜ける、さらに厳重な手荷物検査を受ける。そこでようやくふたたび元のバスに乗ることができるのである。だがこの間にバスの運転手も同様の手続きをすませたあと、停車させてあったバスを廻しに

歩いて戻るので、乗客はじっと待つしかない。その後バスが出発しても、今度は最終ゲートの前で留められ、出国の本人確認のための係官が乗り込んでくるのを待つ。しかし、私たちの前には黄色のバスがとまっており、その前にさらに白いバスのおしりも見えている、この二台は一向に動き出す気配がなかった。そこではじめて気付いたのだが、二人のロシア人バス関係者が私たちをせき立てたのは、この先陣争いのためだった。ゲートの遮断機が上がって白いバスがようやく通り抜けた。だがその遮断機はすぐに下りて、今度は黄色いバスがあきれるほど長時間まったく動く気配を見せなかった。

これと同じ手続きがロシア領に入っても繰り返されることになった。黄色のバスが出たあと私たちの順番が来たが、今度は簡単に通してくれた。ロシア側の出入国管理の建物は狭くて薄暗かった。そこにぎゅうぎゅう詰めになってロシアの担ぎ屋集団が大量の荷物を積み上げて床に腰を下ろしたり、立ってなにやらだべったりしていた。この時はじめて、異常なほど長時間の足止めを食らった理由が飲み込めた。アムール河をはさんだ撫遠・ハバーロフスク間でも、黒河・ブラゴヴェーシェンスク間でもかつては大勢の担ぎ屋たちが商品を山のように詰めた荷物を抱えて、中国側からロシア側へ運び込む光景が見られたそう。だが一昨年と昨年の中露国境紀行の際に目撃したのは、そんな光景がもはやセピヤ色に褪せた写真のごとく過去のものとなった現実であった。中国側の国際交易関係の施設も閑古鳥が鳴いているような雰囲気をつたよわせていた。だがロシアでも、ここから車で五、六時間もかかるチタのような僻遠の都市だと、担ぎ屋が運んでくる物資（袋の外見からして、主に衣料品だろう）への需要はまだ残っているのだろう。つまりソ連崩壊当時に見られた生活状況がまだ息をしているのだろうと推察された。

ロシアへの入国審査は規範通りの厳密な手順を踏んでたんたんと行われていた。次の手荷物検査場へぬける五つのブース（うち二つは人員不足のせいか閉じていた）を前にして、人々はひしめきあって乱雑にたむろしているのだが、そこにはソ連以来の伝統である「行列」の秩序がおのずから出来ているらしかった。ところがどうやらその秩序を乱す「行列破り」が現れたらしい。最初はぼやき声だったが、やがて怒号が飛び交いだした。声の主はすべて女性である。よく聞くと「あなたは」と丁寧な口調でやり合っているが、交わされる内容は、自分の権利を一方的にまくしたてるえげつないものだった。二の腕が異常に太く腹の出た中年女のドスのきいた声がいちばん目立った。騒然となった待合室に秩序を回復させる必要を察知したのか、男性の出入国管理官が現れ、これも丁寧な口調で手続きは規則に則って着々と行われていること、ロシア国民の有する24時間以内に手続きをしてもらえる権利はまちがいはなく守られる、というような見解が述べられた。しかし待合室に充満していた憤りはおさまらなかつた。いらだちの原因はこのままでは鉄道やバスへの乗り換え時間に間に合わなくなるということのようだ。さいわい私たちは、外国人観光客として優先的にブースを通過させてもらい、手荷物検査もスムーズに済ますこと

ができた。それでも中露国境間のおそらく1 km か2 km の距離を4時間もかけて通過しなければならなかったのである。その間、ロシア側の観光会社から何度も問い合わせの電話が添乗員さんの携帯にかかってきたので、私が現状を刻々伝えて対応し、ようやく修羅場をくぐり抜けた。

国際バスの終着点はザバイカルスク駅舎裏手の駐車場だった。あたりはすでに薄暗くなりかけていた。駐車場の奥の方がなにやら明るく、手を振る人々の姿が見えた。私ははたと気付いて走り寄った。やはり私たちを待ち受けていた人たちだった。郷土博物館の大きく開いた扉の前に、ロシアの民族衣装を着た四人の女性が並んで笑顔で私たちを出迎えてくれた。ロシア側の旅行者と現地の報道関係者の姿も見える。「パンと塩」の伝統的儀式で遠方からの客を歓待してくれるようだ。最初に私が大きな丸パンから一片ちぎってちょっと塩を付けて口にする。旅行団参加者の全員がそれをまねて次々にパンをちぎっていただいた。最後の人が食べ終わると、軽快



写真 14

なロシア民謡の曲がはじまり、パンを抱えた女性を含め4人が歌と踊りを始めた（写真14）。

時間はかなり押していたのだが、どうしても博物館の展示も見てほしいという。240km 遠方のチタ市から来た現地ガイドは大きなノートを手にして、学芸員の説明を英語に逐語訳しはじめた。チタの旅行会社には日本語ガイドはいないとのこと。今回の旅行団には英語の出来る人が半数くらいいたのでよかった。またロシア語が出来る人も私を含め何人かいたので、その人たちが適宜ささやき声で日本語解説の必要な人たちに伝えた。この郷土博物館が一番自慢しがっている展示物（といっても小さな石碑のレプリカと地図のみ）は、かつてこのあたりを跋扈したジンギスカンの騎馬軍団の侵攻を阻むため、全長700kmにもわたって築きあげた塹壕型の堡塁らしい。その遺跡は今のロシアと中国、モンゴルにわたって存在するそうだが、もちろんその当時ロシア人はこの地に到達してはいなかった。

現地のテレビ記者がビデオ録画（といってもスマホを三脚で固定しただけ）するというので、私を含め数人をつかまえてインタビューを始めた。私は「日ロ間には領土という難しい政治的問題があるが、解決方法について考えを聞かせてほしい」と質問された。そこで「時間はかかるが、いずれ解決するだろう。なぜなら日本人とロシア人は心を通じ合える可能性のある数少ない民族同士だからだ。ただお互いにもっと大勢が行きしてつきあいを深めなければ」と応えた。あとで、模範すぎる回答だったかなと反省したが、手遅れだった。

もうかなり夕闇が迫っていたのに、もう一個所訪れてほしいところがあるという。案の定、英霊をたたえる記念広場であった。団のみなさんには、これがソ連以来続くロシアの伝統だからと



いって納得してもらった。この日はかなり遅めの夕食になった。そのあと私たちは中国のより少し見劣りのするロシアのバスに乗って 120 km 先のクラスノカールメンスクへ向かった。

### 若い都市にただようソ連の匂い、ロシア側国境地帯での一瞬の緊張

クラスノカールメンスクは 1970 年代のはじめにウラン鉱が発見されたのをきっかけに誕生した文字通り若い都市である。それなのに町の景観はどことなくくたびれ感がただよっている。じっと観察してみて理由がわかった。樹木は内モンゴルよりも背丈も高くはるかに生き生きと育っているのだが、歩道に目をおとすと、舗装の改修がほとんどなされていない。住宅はソ連時代にあちこちで見られたタイプの集合住宅が、あまり手を入れることなく使われているようである。旅行案内に「レストラン」と記されたお昼を食べた場所は、ソ連時代の典型的な「スタローヴァヤ（セルフサービスの食堂）」そのまま、客あしらいもソ連末期とほとんど変わっていない。つまりこの町は、生まれた当時の姿形をいわば「動態保存」していたのである。

町を案内してくれた人は、市の中央図書館に勤めるかなり知性的な感じの女性であった。この町で発行されている地元紙の快活な女性記者もホテルからずっと同行してくれた。どの通りから町の建設がはじまったとか、どんな人々がソ連各地から招かれて住み始めたとか、鉱山開発を中心とした地元産業が発展し、色々な種類の工場が次々に造られていった経緯などを、ガイドさんと一緒になって説明してくれた。私がソ連時代に訪れた若い町、たとえば水力発電とパルプ製造で有名なシベリアのブラーツクは、たしかにいかにもはつらつとした息吹にうち満ちていたが、彼女たちが情熱的に語ってくれた口調からは、そんな過去の「思い出」を数十年ぶりに聞かせてもらっているような感じがした。

私たちがその日訪れた「英霊広場」は、ザバイカルスクのものよりもはるかに規模が大きく、あたらしい記念物を増設している最中だった。それはよく見ると独ソ戦時代のものだけではなかった。当地出身者で勲章をもらった戦死者は、ただの戦死者が名前と戦死した時の階級が列記されるだけなのと扱いが異なり、ひととき立派な記念碑が造られ、その勲功が麗々しく刻まれている。



写真 15

没年をみると 1980 年とか 1981 年とかになっている（写真 15）。ということはアフガン戦争で命を落としたということだ。別のところには没年が 1994 年とか 1996 年のものもある。こちらは第 1 次チェチェン戦争の戦死者であろう。

アフガン戦争が始まった当時、私はレニングラードのロシア文学研究所で一年間研修生活を送っていた。この戦争が原因で 1980 年のモスクワ・オリンピックは、日本を含む西側諸国の参

加拒否にあった。やがてアフガン帰還兵の精神的トラウマ問題がソ連でも問題になり、息子を兵隊にとられた母親たちの抗議運動がモスクワなど大都市で起こったのを思いだす。あとで分かったのだが、アフガンで地獄の体験をした男と私は知り合っていたのである。彼は私にその体験を打ち明けることなく突然死してしまった。じつは彼の姑にあたる女性とは、1979-80年のロシア文学研究所滞在時に知り合い、以来ずっと親交をあたためてきた。その彼女がある時、婿がアフガン帰りだったこと、一人息子をついに徴兵に応じさせなかった（その方法は聞かなかった）ことを明かしてくれたのであった。

チェチェン戦争の時にも、ロシアにはそれなりの反戦運動はあった。反体制派とはいわないまでも、自分の国の歴史を客観視できる知的な人なら、この英霊広場のありかたに多少の抵抗は感じてしかるべきだと思う。いかにプーチン政権の厳格な指示とはいえ、私たち外国人にさえこのようにあつけらかんとして案内できるということは、ソ連時代にすり込まれた思考様式を（おそらく模範的なコムソモール員だったのであろう）から脱する機会がなかったのだろう。

この町には立派な鉱物資源博物館があった。「ウランの陳列はないのですか」と聞いてみたら、それはどうやら素人が見て分かるような代物ではないそうだった。その大きな建物の1階フロアで蜂蜜売りが幾種類もの蜂蜜を並べて量り売りしていた。ロシアの蜂蜜は常連さんの間では大人気で、ここでもさかんに買い求めたため、買い物の賑わいはしばらく続いた。蜂蜜屋の夫婦には、その日はかなりの儲になっただろう。

ザバイカリスクに戻るには1時間半ほどかかるので、私たちはこの町を早々に後にした。今度はハクさんが自社のバスでロシア領に入学して迎えに来てくれていた。時間の余裕がまだ少しあったので駅舎の正面を見ることになった。ロシアの鉄道の軌道幅は中国のものよりかなり広い。そのため国境をはさんで貨物の荷を積み替えなければならない。駅舎の近くの陸橋に登ってみると、2本ずつのレールがカーブして交差し、並行して4本敷かれている様子がよく分かる（写真16）。今回は鉄道ファンが多いようでカメラを持ってあちこちに散らばっていった。雲行きが急に怪しくなり、あっという間に雨が降り出した。内モンゴルでも雨が降らなかったわけではなかったが、すべて夜中で、日中は快晴続きだった。



写真16

国境をまたぐと天候まで変わるものかと、一瞬思ってしまった。雨は間もなく止んだのでずぶ濡れにならなくてすんだ。

いよいよ国境警備の厳重な区域に入る。事前に域内観光許可書をもらっていたので、バスは最徐行しながら鉄条網で囲われた敷地内に入っていった。鉄条網越しに見える満州里の遠景はどこかもの悲しかった(写真17)。そのあとバスはがたがた腰を振りながら小高い丘の上までのぼった。ここからはロシア側の警備塔も直ぐ近くにあり、国門も逆順で見えた(写真18)。見晴らしが良かったので撮影する人は手早くパチパチと撮り、急いでバスに戻った。すると、発車寸前にカーキ色のトラックが一台近寄ってきて進路をふさぐようにして停車した。間もなく同じくカーキ色の四輪駆動も現れてバスの入口に幅寄せし、二人のロシア国境警備兵がしばらくどこかと電話連絡した後、バスに乗り込んできた。



写真17



写真18

添乗員さんは観光許可書を取り出して二人に手渡した。すると「撮影するにはまた別の許可書が必要だ」と強面になった。私たちは途方に暮れた。このまま連行されて取り調べを受けると、目と鼻の先の中国領に戻れなくなってしまう。するとこういうピンチをこれまで幾度となくくり抜けてきた岩下さんが、自分のカメラの裏画面をロシアの官憲に見せ、ここで撮った画像を目の前で消去するからと交渉を始めた。添乗員の手塚さんも自分のスマホから、そしてもう一人どなたか忘れたが今撮った画像を消してみせた。二人の国境警備兵はすこしの間しかめ面をしていたが、つぎにニコッと笑って日本語で「アリガト」と言い残し、バスから下りていった。私はおもわずロシア語で、「ザ・ドゥルージブー(友情のために)」と大声を発した。かれらは別に振り向きもせず、そのまま去って行った。

中国への再入国は、担ぎ屋集団が一緒じゃなかったのでスムーズにすんだ。ホテルの「友誼賓館」では予定通り午後7時に夕食が始まった。瀋陽支局に勤務しているという讀賣新聞の東記者が満州里に取材のため出張に来ていて、岩下さんと懇意だということで、同席していただき中国での取材体験などを話してもらった。この日が実質「最後の晚餐」になるので、全員が次々にたって旅の印象などをのべ、乾杯しあった。

満州里には以前から様々な職種のロシア人たちが夜に大勢集まってくるレストランやバーが

多数あるという。夕食後疲れて横になっていると、岩下さんからお誘いの電話があった。ハクさんの案内でそのような場所を物色してまわり、かなり明るくて開放的なフロアーが気に入って、ある店に入った。私たちは奥の一角に陣取った。すると隣のテーブルでラフな T シャツ姿のロシア人らしい年配の男性と、それより若めの仕事仲間らしい二人が、けっこうな「スラング」を交えて盛んに談笑していた。興味があって聞いてみると、ロシアじゃなくベラルーシから木材を運んできた「トラック野郎」とのことだった。彼らは3人交代で運転し、地球の5分の1か6分の1の距離を走ってきたというのである。なるほどその達成感が彼らをこんなにも快活にさせているのだろう。年配の方の男性が、年金をもらえるまでにはまだ暫く肉体を痛めつけなきゃならないといいながら、スマホを取り出して、かわいい孫娘の動画を見せてくれた。ソ連が崩壊して連邦を形成していた各共和国はそれぞれの道を歩き出した。私の知る限り白ロシアはかならずしも順調な道をたどってはいないはずだ。しかし、このように、人々は「どっこい生きていく」のだということを確認できて、こちらも嬉しくなった。

翌日も朝食は7時と早かった。満州里では往路で見ることが出来なかった観光スポットを逐一紹介し、真っ直ぐハイラルへの200kmをひた走った。この旅行エッセイは予定分量を大幅に超過したので、その後も印象的な出来事は結構あったのだけれど、残念ながら割愛させていた。

9月16日は、ハイラル、北京を往路の逆回りして、夕刻無事羽田に着いた。今回の団は年齢構成も高めで、札幌では健康状態に自信がないとおっしゃった方もおられた。ところが目の前を見ると、ご本人が羽田では「動く廊下」も使わず、もう一人の老齢の道連れさんと結構な早足で手荷物受け取り場所に向かっておられた。それを見て私はなんとなく肩の荷が下りた気分になった。